

エリザベート・ゴスマンの生き方と思想

——フェミニスト神学からのメッセージ——

岡野 治子

二〇一九年五月一日、エリザベート・ゴスマン⁽¹⁾さんが波乱に富んだ生涯を閉じられた。九十一歳であった。筆者にとって、彼女はドイツ語の先生であり、のちにフェミニスト神学の師、同時に宗教・異文化間対話の理想的対話者でもあった。しかしそれ以上に、学術的つながりを超えて、彼女の存在、生き方そのものが、筆者には至上のモデルであった。このことは、筆者にだけ該当するのではないと思われる。国籍を超えた多くの関係者、ご同僚方をはじめ、神学の仲間、お弟子たち、種々の男女の交友たちの言動の端々にゴスマンに対する深い敬愛の念が看取できるからだ。

次女のヒラリア・ゴスマンから訃報を受けた瞬間、筆者のなかで走馬灯が回り始めた。学生時代のドイツ語の授業、いくばくかの時を経て偶然の再会、その後ご一緒にフェミニスト神学事典の編集・翻訳、東西の思想に関するシンポジウムの主宰、ドイツと日本の女性研究者の懇親を兼ねた研究会などなど、多くの時間を共にした思い出の数々が、点滅し続けている。

ヒラリアからの訃報通知には、ミュンヘン大学に隣接する聖ルートヴィヒ教会での葬儀ミサ（五月十八日）の案内に添えて、ドイツの女性作家マルヴィーダ・フォン・マイゼンブーク（一八一六―一九〇三）の言葉が記されている。

「人生とはすべてが徐々に記憶となっていくものだ。たくさん愛しい映像に彩られた、ひとの内的世界を見るときは、実に不思議なものだ。その描かれる図像は、ここでは不滅に思える。地上での存在は消滅するものではあるが、それは実に星の光のようなものだ。天体自体がとくに破壊されたとしても、星の光は我々に届くのである」⁽²⁾

この言葉は、いかにもゴスマンの生き方にふさわしい。この言葉こそ、ゴスマンの存在全体を言い当てている。彼女の多くの研究書や論文、特に自叙伝である『女に生まれたのが間違い』（Geburtsfehler : weiblich, IUDICIUM-Verlag 2003）は、この意味で私たちに届いた星の光といえる。これは、ゴスマンの恩師、ミュンヘン大学神学部M・シユマウス教授が、ゴスマンに対し呟いた言葉だそうである。それを自叙伝のタイトルに選んだのは、自らのドラマティックな生涯の象徴的表現だと感じたからであろう。時代は女性神学者の活躍を認めなかった。しかし女性だからこそ神学にこだわる必然を感じ、生活の新天地を開拓し、異文化間対話の先駆者となったゴスマン。彼女の自叙伝の魅力は、失意の経験を叙述しても、時代の性差別や偏見への恨みや批判に終始するのではなく、ジェンダー視点と文献資料を駆使し、彼女の生きた時代と神学・哲学という（男性専科）の世界を炙り出したところにある。アリストテレス由来の（女（雌）は男（雄）の出来損ない）という生物学的人間観、これは西洋思想の深奥に沈潜していたイメージでもあるが、このアシンメトリーな人間像を照射しなおした点で、ゴスマンの

面目躍如と言える。人への温かい関心、そして絶望を希望に転換する彼女のすぐれた心性は、多くの（男女の）後進への優れたメッセージでもある。

フランクフルト大学名誉教授のラスケ司祭による葬儀ミサ（二〇一九年六月七日）は、ゴスマンへの敬愛と感謝に満ちた追悼であった。聖職者による温かな追悼文を少し紹介しよう。

「思い出すこと、それは彼女がいつも、明朗で、強い印象を与え、感受性に富み、ユーモアのセンスをもち、会う人みんなに好意的であった。大学教授職への彼女の多くの応募と同じ数の却下に対して、軽んじられ、無視され、多くの痛みの経験を持ったことを隠しもしなかった。それを自序伝に、包まず語り、記録したが、自己憐憫やひねくれの感情を表すことなく、『女に生まれたのが間違い』と、師であるミヒャエル・シュマウス教授の言葉を引用し、コメントしている⁽³⁾。

続いてラスケ司祭は、ゴスマンが、埋もれていた女性の伝統を発見したこと、すなわち才能を開花させ、多様な活動・思想を紡いだ女性たちの存在を教会史において発見し、そのことで教会での女性の力と位置を可視化したことに感謝する。このゴスマンの認識と視点により、彼が自らの神学、神理解、ひいては教会共同体への認識に新たな光を当てることができた、と告白している。現在でも、フェミニスト神学にアレルギーを表明する聖職者が少なくないだけに、彼の言葉は傾聴に値する。

1 祖国ドイツでの失意と榮譽そして日本で築いた生活と学問の基盤

病を得て軸足をドイツに移したのが二〇〇八年のこと。それまでの Gosman は、どのように日本と出会い、その後の人生を決定づける日本滞在は、どのように決まったのだろうか？

「日本に骨を埋めたい！」とは、Gosman の口癖のように感じた。ドイツはオスナブリュック生まれの Gosman が、どうしてその半生を日本で過ごすことになったのか？その経緯を、彼女の前述の自叙伝『女に生まれたのが間違い』をもとに、紹介しておこう。

に満たない長女ヒルデガルト・デボラ（ひでこちゃん）を連れて、Gosman 夫妻が初めて来日したのは、彼女の学位取得（神学博士）直後の一九五五年。上智大学ゆかりのイエズス会士の仲介で、日本との縁が結ばれた。彼女が東京に居を構えて、まずいぶかしく思ったのは、五〇年代のドイツの都市の光景に比べ、すさまじかった筈の東京大空襲の傷跡が全く見当たらなかったことだという。戦前の建物が、木造であったこと、それゆえに再建と復興が比較的容易であったことを知り、納得できた…等々、新鮮な観察眼で、五〇年代の異文化体験を叙述している。

上智大学や聖心女子大学で、ドイツ語および西洋哲学の講師を務めたのち、ドイツの大学教授資格 (Habilitation) 取得のために、一九六〇年に一時ドイツへ帰国。一九六二年、教授資格請求論文を書き上げ、ミュンヘン大学神学部シュマウス教授に提出。教授の誠意ある計らいにも拘らず、当時の神学部教授資格が、「聖職者に限

定される」という規定がネックとなり、論文の受取そのものが拒否される。聖職者のみが神学教授の資格を有するという、当時のドイツ神学部の規定は、換言すれば女性は、その性ゆえに、教授職から排除されていることを意味する。(秀逸)というシュマウス教授の折り紙付きのこの論文は、なんと十四年後の一九七七年になって、神学部ではなく、哲学部教授資格取得と認定されることになる。ゴスマンは、神学者としての厳しい宿命をこの頃から意識させられと思われる。その後一九八〇年頃⁽³⁾、カトリック神学部にも変化の波が押し寄せ、ドイツにも女性教授が徐々に登場する。有難いことだが、エリザベート・ゴスマン、この「早く生まれ過ぎた」悲劇の女性神学者を支援する人々も少なくなかったのだ。この論文は少なくとも、公刊という日の目をみることになる⁽⁴⁾。

一九六八年、聖心女子大学の教授に昇任。当初は *Humanities in English* という国際セクション所属で、(世界文学)というカリキュラム枠で教鞭をとることになり、教場での言語は英語であった。韓国、フィリッピン、南米諸国と多彩な国際色のうえに、留学生もキリスト者と非キリスト者が混在していることで、当惑と緊張の毎日が続いたようである。自叙伝には、留学生たちとの文化交流のエピソードが印象深く記されていて、楽しみでもあったことが読み取れる。ゴスマンの異文化への関心も、ますます強化されたと思われる。画期的な著書『日本キリスト教史—宗教的由来、世俗的未来—』(*Religiöse Herkunft, profane Zukunft? Das Christentum in Japan, München 1965*) を世に送ったのも、この時機であった。イエズス会のキリシタン研究者の協力を得、キリシタン時代の宣教師たちの書簡類を読み解いた力作である。ご本人には、日本語文献を参照していないという後ろめたさがつきまತ್ತたようであるが、宣教師の書簡や西洋の研究者による見解を緻密に網羅し、日本人の生活感情をも把握した記述の展開は、日本人読者にも新鮮で、貴重な視点を提示している。

一九七四年聖心女子大では、この別科が廃止されたため、ゴスマンはその後、哲学科の教授として、古代・中世哲学やキリスト教学を担当。この時から講義やゼミは日本語で行うことになり、大変なプレッシャーとなっていたようであるが、持ち前の語学の才能と努力で学生たちとの良い関係を築いている。彼女の手に余る日本語表現の問題は、ゴスマン流の表現を借りれば、哲学研究室（五人組）の先生方に助けられた、といくつもエピソードが感謝の内に語られている。⁽⁵⁾

この時期、（多分）日本語に苦戦しながら、西洋哲学史やキリスト教学を担当したこと、それが、ゴスマンのフェミニスト神学者としての道を決定づけたと思われる。この一連の講義が、〈神学史のなかの女性史研究〉を続ける決定的契機となり、彼女の最初のフェミニスト神学の著書、『キリスト教とフェミニズム』⁽⁶⁾ (Die streitbaren Schwestern. Was will die Feministische Theologie? Herder1981) が誕生するからである。

一九九〇年、ミュンヘン大学哲学部に非常勤の教授職を得る。当時の哲学学生組織の要請で、講義委嘱がなされ、東京での講義の合間を縫って、ミュンヘン大学での集中講義・ゼミナールを担当。徐々に学位請求試験をも担当してほしいという学生の要望が高まり、大学側もそれに呼応する。ゴスマンも、母国語での講義やゼミが、どれだけ（楽である）か、告白している。ところがミュンヘン大学側から、ある前提条件が付けられる。聖心女子大学の退職、という条件である。当時の学長、シスター内山と話し合い、教授会の承認を得、円満に早期退職が実現する。その後も、名誉教授として大学の祝祭典に参加することで、聖心の学生、同僚たちとの親密な交流が続けられる。そのよい証が、ゴスマンの65歳誕生日に上梓された大部の記念誌『時代と大陸にまたがる神学 Theologie zwischen Zeiten und Kontinenten』 (Hrsg. Theodor Schneider & Helen Schütingel-Straumann, Herder 1993) に

四人の同僚が寄稿していること。また細川ガラシャのヨーロッパ的受容を記述した彼女の英文論文が、かつての教え子によって邦訳されているなどである。水野賀弥乃訳「ガラシャ細川玉の実像と虚像」（岡野治子編『女と男の時空 中世』藤原書店2000）は、ヨーロッパの視座からの貴重なアプローチとして好評であった。

一九五五年以来、日本とドイツを振り子のように往復することが、ゴスマンの日常であった。自叙伝によれば、教授資格を獲得した一九七七年から、ゴスマンはなんと三十七回、ドイツ語圏の大学の教授ポストに応募している。日本での生活とその環境をこよなく愛したゴスマンであるが、神学者として母国で活動する夢を捨てきれなかったのは、当然であろう。しかしその応募の試みはすべて却下されたのであった。

自叙伝には、各大学の人事委員長からの報告文書が多々掲載されているのに、興味を惹かれる。選考結果の素っ気ない通知であったり、ゴスマンの学問の質が高すぎるので、当該学部にふさわしくない、と奇妙な理由付けをしたものから、外国に居住していることが問題、という指摘に至るまで、それぞれの理由付けが興味深い。当時のドイツ語圏の大学、それも特にカトリック神学部が一貫して男性中心主義に拘っていたことが看取される。

一九七〇年代後半には、非聖職者が神学部教授として活躍する時代が始まってはいたのである。ドイツ語圏カトリック神学部は、フェミニスト神学のパイオニアを受け入れる準備ができていなかったということであろう。

ゴスマンと似たような宿命を担うエリザベート・シュスラー・フィオレンツァも、アメリカ合衆国ハーバード大学神学部で教授職を得、初期キリスト教成立の過程を女性の視点で問い直した『彼女を記念して』（山口里子訳 日本キリスト教団出版局一九九〇年）という画期的著書により、一躍名を馳せた。この二人のドイツ人女性神学者（偶然ながらエリザベートの名前も共通）は、友情を育みながら、フェミニスト神学のパイオニアとして、

後進の牽引役を担ってきた。同時にこの二人の生き方は、当時の狭量な男性中心のカトリック神学部環境を暗示しているともいえる。しかし「救い」を感じるのは、このような時代精神と環境にもかかわらず、ゴスマンの卓越した学術業績を評価する神学者、神学部も少なくなかったのである。一九八五年にグラーツ大学、一九九四年フランクフルト大学、二〇〇三年バンベルク大学とルツェルン大学、そして二〇一七年にゴスマンの生まれ故郷オスナブリュック大学からそれぞれ名誉博士号を授与されている。名誉博士号をこれほど多方面から授与された神学者は稀であろう。男性の名誉のために一言補足したいが、この荣誉授与には、男性神学者が少なからず関わっている。

2 日本人が抱いたゴスマンのイメージ

彼女に出会った日本の人々が抱いた印象をいくつか辿ってみよう。それを通して、当時の日本において、妻であり、母であり、神学者をどのように理解したのか、部分的にはあっても再現してみよう。二〇世紀後半の日本における異文化受容と女性観が確認できるからである

2・1 ある学部長のゴスマン理解

一九六〇年四月、大学でドイツ語を学ぼうと意気込んでいた我々新入生に、学部長から、ドイツ語教員としてエリザベート・ゴスマンが紹介された。その紹介の辞を私は生涯忘れないであろう。

「エリザベート・ゴスマン夫人が皆さんのドイツ語授業を担当します。神学博士であり、ドイツ文学に造詣の深い素晴らしい学者です。彼女は卵の割り方を知らず、台所仕事は苦手なようですが、その教養の深さには誰もが感嘆しています！」家事一般には長けていないが、学問にはすぐれている、と強調することで、この善良な学部長は、ゴスマンの卓越した資質を褒めたたえたのである。

ナイーブな我々新米学生は、この優れた先生からドイツ語を学べることで、感激半分、畏怖半分と緊張した。実際、語学の授業が始まって驚いたものだ。温かくて、我慢強い。頼りない我々学生一人ひとりの良いところを何とか見つけては、褒めてくれる。筆者には、なんとスピーチコンテストに出場するよう、勧めてくれた。まだドイツ語でアルファベットさえ発音できない筆者に、グリムの「星の銀貨 (Sternchen)」を暗唱するよう、指導し、コンテスト直前には、お辞儀の仕方まで指南してくれたものだ。楽しい学びの思い出である。

その翌年、ゴスマンは、教授資格請求論文を仕上げるために、ドイツへ帰国。残念な別れであった。名残惜しくて、ほぼドイツ語クラス全員が横浜港まで見送りに行った。一九八三年に、ゴスマンが研究会を主宰すること、偶然あるドイツの友人を介して、ゴスマンに再会することになった。横浜港で見送ってから、二十年余り後のことである。友人にゴスマンを紹介された私は、「『星の銀貨』を覚えていただいた！大卒業生です！」と自己紹介したところ、いきなり彼女との距離が縮まった。

「それは、*misogyni*、典型的な女性敵視の表現です！」とは、ゴスマンの怒りのことばである。我々新生にゴスマンを優秀な学者として紹介したあの学部長の文言を思い出し、それを伝えた時の彼女の反応である。彼女が、如何に大学の同僚から尊敬されていたかを伝えたかったからである。しかし彼女の怒りとその理由を聞いて愕然

とした。家事など女性役割における無能を引き合いに出すことで、特定の女性の優れた資質を際立たせるレトリックだという。当時のフェミニズムとは縁遠かった自身の不覚ではあるが、筆者は初めて *misogyn*、即ち当該の女性を褒めながら、その実、女性全体を貶める概念である、と学んだ。遅まきながら、日本語表現には、*misogyn* ないし言い回しがふんだんにあることに気づいた。「女とは思えない論理力」「女にしておくのはもったいないほどの行動力や決断力」等々。たとえば折々に婚姻の席で、花嫁側の上司が祝辞にこうした表現を使用していたのを思い出す。語り手には全く悪意はないが、一人の女性の長所を特化することで、背後に含意される女性一般の劣等を前提としている。意識の深層に沈殿する性差別的常套句のなんと多いことか。無論こうした常套句を用いるのは男性だけではない。女性も多くはこれを内面化している。一九八三年にゴスマンと再会するや否や、フェミニズム思想の奥深さを知らされた。

2・2 日本の神学者におけるゴスマンのイメージ

欧米のフェミニスト神学を視野に入れた研究で知られる優れた神学者がその著書『新約聖書の女性観』（岩波書店一九八八年）の序文にゴスマンとの出会いを短く紹介している。著者は、大学院時代にドイツ語会話の先生であるゴスマンの夫君にしばしば自宅に招かれ、そこでゴスマン夫人にも出会っている。彼女はすでに神学の学位を有していたはずであるが、その言及はなく、『女性解放』という言葉も彼女から一回も聞いたことがないと述懐している。フェミニズムに深い理解を示すこの神学者にあっても、当時はドイツ語教員の奥様というレベル以上の理解を持てなかったのであろう。

一九八四年、ゴスマンの最初のフェミニスト神学の著書『キリスト教とフェミニズム』⁽⁷⁾が翻訳出版された時のことである。その直後、独自の聖書解釈で名を馳せた（後にはフェミニストを自認する）プロテスタント神学者の書評が、よく読まれる某週刊誌に掲載された。驚愕の内容であった。日本語もできない帝国主義の白人女性宣教師が、アウグスティヌス他の教父およびスコラ神学の思想を恣意的に引用している。この誤りだらけの書は、「全く読む価値がない！」と切り捨てていたからである。白人で女性という指摘だけは正しいが、カトリックの世界をお分かりでない、的外れの批判であった。また大学ではすべて日本語で講義しているゴスマンに対して、日本語能力不可という指摘は、不正確であった。また彼女のメッセージに関する限り、日本語の知識は必要条件ではない。ゴスマンは、この論拠に乏しい批判の前に、驚きと哀しみで茫然自失に陥っていた。反論や補足説明の余地を許さない情緒的書評だったからである。訳者の一人としての責任と義憤から、彼女の願いをこめて、同誌での反論を試みた。彼女が、帝国主義的宣教師でないこと、人格攻撃ともとれる書評が、著者を深く傷つけていることを述べ、ゴスマンの専門が中世哲学・神学であることを紹介し、神学史の批判的問い直しという著者の論旨のどこに誤りがあるのか、具体的に教示いただきたいという、要請で締めくくった。果たして、翌週の当該誌に氏の反・反論が掲載された。それは学術的議論への意図が認められないだけでなく、反論を投書した筆者への感情的敵意に終始する内容であった。こうしたレヴェルでのやりとりは不毛と判断し、ゴスマンも納得のうえで、この問題に終止符を打った。ドイツ語圏ほどではないにしても、日本でも女性による神学上、もしくは哲学上の発言は、稀有であっただけに、男性神学者には一種のアレルギーだったのかもしれない。あえてこのような（誰にとっても）負の記憶の報告を記した筆者の意図は、ゴスマンを通して、当時の神学界の女性観を一部ではあ

れ、記録しておきたいことにある。

ちなみに、この書はドイツでは、「一方的に男性を敵に回すのでなく、学術的な裏付けに徹している。問題の解決に向けて、必要な条件と前提を冷静に、希望をもって呈示している」と、好意的に受け取られている。

3 ゴスマンの学術的功績

五つの大学から名誉博士号を授与されたゴスマンの功績を紹介するのは容易ではない。とりあえずゴスマンの業績全体を概観し、可視的になるのは、彼女は以下の三領域のパイオニア的存在ということである。第一に神学史のなかの女性研究、第二にフェミニスト神学、第三に宗教間対話である。

3・1 神学史のなかの女性研究

一九四七年、大学に入学して間もない頃、ゴスマンは、ビンゲンのヒルデガルトの書を偶然に手にしたという。それが男女両性を視野に入れた人間学に関心を持つ契機という。第二バチカン公会議以前に、ゴスマンはエバがアダムから派生した存在という伝承を否定していた⁽⁸⁾。その論拠の一つは、ヒルデガルトの主張にある。彼女はそれまで誘惑者、原罪の元凶ともイメージされたエバが、アダムの場合より洗練された質量、すなわち人間の身体から造られたために神の傑作であり、そのために子を養育したり絹織物製造のために必要な「器用な手」という特権が与えられた、と考えている⁽⁹⁾。

最も画期的なのは、一九八四年から一連の『哲学史・神学史のなかの女性史研究史料集』(Archiv für philosophie- und theologiegeschichtliche Frauenforschung, Bd.1-7, IUDICIUM 1984-1998)を刊行したことである。この史料集において、過去数世紀に遡り、女性のための教養と学問の場を勝ち取ろうと闘い続けた意識の高い女性や男性たちについての研究が凝縮されている。個々の思想家の主張を肉付けしているゴスマンの序文が見事である。

3・2 フェミニスト神学

ドイツ語圏で活躍するカトリックおよびプロテスタントのフェミニスト神学者たちが一九九一年に刊行した『フェミニスト神学事典』⁽¹⁾の編集者の一人となったのがゴスマンである。「合衆国のフェミニズムとは別に、ヨーロッパ的事象と問題を提示するフェミニスト事典を造ろう」というエリーザベート・モルトマン・ヴェンデルのアイデアが契機となり、三人のカトリック神学者(E・ゴスマン、H・ピサレク・フリードリヒスト、H・シユンゲル・シユトラウマン)、三人のプロテスタント神学者(E・モルトマン・ヴェンデル、L・シヨットロフ、I・プレトリウス)が集うことになり、編者となる。刊行まで五年をかけて、意見交換をしながら、フェミニスト神学の中核の概念および神学の周辺の諸概念(全体性、経験、相互性、男性中心主義など)を八十項目に集約し、それぞれの執筆者を探した。結果的にフェミニスト神学者の絆を強め、情報交換の絶好の機会になったばかりでなく、当然ながら、種々の宗教を組み込んだエキユメニカルな事典の誕生となった。世界宗教における女性という項目が設けられていることは、異文化の人々の注意をも喚起する。ヒンドウ教、仏教、儒教、イスラムの女性の位置づけを扱っている。「エバ」、「人間論」、「マリア論」、「霊性」などの項目執筆のほか、この事典のエキユメニカルな

性格は、フェミニズムに付随する必然ではあるが、ゴスマンの意向が強く反映したものであろう。

画期的なフェミニスト神学事典の編集、刊行作業と同じころ、ESWTR（ヨーロッパ女性神学者協会）が結成された。一九八六年、ヨーロッパの女性神学者、特にプロテスタント神学者たちの主導の下、この協会が立ち上げられた。女性神学者間のネットワーク、コミュニケーションの必要性が高まったことが動機である。この年の第一回会議には、八〇人もの女性研究者が集い、ゴスマンおよびノルウエーのカリー・ビョレセン（オスロ）が記念講演者として招待された。ゴスマンの記念講演のテーマは、「スコラ神学およびビンゲンのヒルデガルトにおける神の似像性とその平等性」であった。ヒルデガルトはすでに、神学の伝統的解釈とは逆に、男女の似像性は平等である（男から女が派生したのではない）、と主張していたのであった。ちなみに中世神学においては、神の似像である第二の意義、即ち神を代理するという意義においては、女性は男性に劣る存在とされてきた。一三世紀のスコラ神学者トマス・アキナスによって中世の女性観が凝縮されている。

「神がすべての被造物の原因であり、目的であるように、男性は女性の原因であり、目的である」⁽²⁷⁾。

3・3 宗教間対話

フェミニズムは、地球上すべての女性に関わる問題を対象とするために、必然的に国際的であり学際的な視野を持つ。神学者としてのゴスマンは、キリスト教と日本宗教との対話として種々の論考を発表している。上述したように、一九六五年に『日本キリスト教史』⁽²⁸⁾を著したあと、日本の女性の立ち位置についても論述している。古代日本の女性に焦点を当てた論考「Am Anfang war die Frau die Sonne... Die Frau im alten Japan」(「元始女性は太

陽であった——古代日本の女性⁽¹⁴⁾。ほか、一九九八年の日本宗教における女性の役割を分析した「Zur Rolle der Frau in den japanischen Religionen」（日本の宗教における女性の役割）⁽¹⁵⁾がある。さらに日本特有の現象、キリスト教が禁じられた後も、潜伏キリシタンにより秘かに継続されたマリア崇敬にも焦点を当てた考察もある。⁽¹⁶⁾

筆者にとっても思い出深いのは、恩師トーマス・イモース神父の70歳の記念論文集にゴスマンと共同執筆した初めての論考「天国に女性が不在・東西のエスカトロギー思想における女性存在（Himmel ohne Frauen. Zur Eschatologie des weiblichen Menschseins in östlicher und westlicher Religion）」⁽¹⁷⁾である。外典「トーマス福音書」キリスト語録一一四に「变成男子」の思想が盛られている。

「シモン・ペトロが彼らに言った、『マリハムはわたしたちのものから去った方がよい。女たちは命に値しないからである。』イエスが言った、『見よ、私は彼女を（天の王国へ）導くであろう。私が彼女を男性にするために、彼女もまた、あなたがた男たちに似る活ける霊になるために。なぜなら、どの女たちも、彼女らが自分を男性にするならば、天国に入るであろうから。』」

これは「法華経」（提婆達多品）に登場する童女が变成男子を遂げて、仏になった物語と酷似している。ともに卑しい、浅学非才な存在とされる女性が、訝しむ男弟子の目の前で、師の力で男に変わって、悟りを開く。こうした思想は、キリスト教では主流にならなかつたが、両者の背景には社会の家父長制の影響を受けた女性観が作用していると思われる。本来は象徴的に性差を用いて、衆生の苦しみや葛藤の状況と平安や解放された状態を表していたものが、現実の性差そのものの優劣と解される。家父長制と男性中心主義を背景に象徴言語と現実言語の混同がおきてしまっている。精神性を男性性、

感性を女性性と考えるアレクサンドリアのフィロン以来近代まで、仏教では種々の大乘経典に記されていることから、象徴言語は権威をもって、ほぼ二〇世紀まで男性観、女性観を規定してきた。

4 ゴスマンの日本における活動

ゴスマンにとって、上述したような三つの領域は、時間の経緯によって徐々に加えられたのではなく、最初から実存的に意味を持った複合的課題であった。それは取りも直さず、彼女が妻、母、神学者のいずれの役割を犠牲にすることなく、自己実現を目指したことと関係している。ゴスマンは二人の娘たちを愛情一杯に育てながら、敢えて女性を排除する神学領域へと身を投じたのである。

4・1 邦訳された最初の本

ゴスマンの基本的な女性観が端的に顕れているのは、最初の邦訳『女性 その虚像と実像』(Das Bild der Frau heute, Düsseldorf 1962)の序文である。自立的女性がテーマとなっている。彼女の意図する自立の女性とは、女権拡張論者ではない、と明言する。

「宥和で、非母性的でなく、人のことばにも静かに耳を傾けることができ、誤った仕方では他に従属はしなくても、快く他と共存するすべを心得た女性をいいます¹⁸⁾。和して同ぜずの主体性をもち、「育むこと」を好み、能動的でも受容的でもあってよい、そして他者との関係性を愛する女性、そうした女性観を俯瞰すると、ゴスマン自

身の生き方と重なる。

4・2 ドイツ人と日本人の女性研究者から成る研究会の結成

一九八三年、ゴスマンの主導で、ドイツ人・日本人研究者による研究会が結成された。神学、哲学、宗教学、日本学、ドイツ文学、女性学、歴史学等の専門分野の女性たちが集まり、共通言語はドイツ語と日本語で、種々の領域を横断する学際的で、国際的な視野を持つ研究会である。会は、年に四回、和風で、チャージングに仕上がらえられたゴスマンの自宅で開催され、その都度メンバーが交代で講演をした。その会の雰囲気は、ゴスマンの性格そのままに、きわめて居心地がよく、質の高い講演と活発な質疑応答があり、メンバー相互の関係性も親密であった。ワイン、コーヒー、お茶、ゴスマンの手作りのケーキ、サンドウィッチなどが居心地の良さを際立たせていた。

この会の魅力は、ゴスマン自身の、そしてメンバーそれぞれの最新の研究発表に与れることであり、また時には、著名な研究者が客として招待され、講演をしてくれた。エリザベート・モルトマン・ヴェンデル、ヘルン・シュンゲル・シュトラウマン、エリザベート・シュスラー・フィオレンツァ、イーナ・プレトリーウス、ウルブラ・キング等の講演を至近距離で親しく聞き、心おきなく質問が許される機会を持てた。ゴスマンの交際範囲の広さを偲ばせる名士たちであった。

この研究会を抛り所にして、ゴスマンとメンバーたちの種々の活動が展開される。主なものを挙げてみよう。

4・3 『フェミニスト神学事典 (Wörterbuch der Feministischen Theologie)』の翻訳⁽¹⁹⁾

一九九四年、翻訳に取り掛かる。ゴスマン、岡野の二人に加え、荒井猷氏も共同監修を快諾してくれた。フェミニスト神学に造詣の深い、プロテスタント神学者の協力を得られたのは、心強かった。二人の翻訳協力者を確保する。

神学事典の翻訳・監修は困難を極めた。すべての翻訳者は、それぞれの領域の優れた専門家であったが、多くの場合キリスト教神学に馴染みが薄く、文化コンテクストの違いもあり、専門用語の訳語を定めるのは容易ではなかった。なかには明らかな誤りではあっても、日本人の心性にぴったりの誤訳があった。ドロテー・ゼレの担当項目の一節に、産婆が、原発産業にプロテスタトする意思を示すべく、原子力発電所の電流の通った柵に、いのちを取り上げる産婆資格証明書を引っかけた、と書かれていた。果たしてその個所の訳は、産婆は、反対のあまり、資格証明書と共に、原子力発電所の柵に身を投げた、というものであった。ゴスマンの本音は、この見事な誤訳をそのまま活かしたかったようである。⁽²⁰⁾ もっとも私たちは原本に忠実な道を選んだ。四年の歳月を要した翻訳の監修には多くの苦労はあったが、笑いと楽しみも少なくなかったのだ。課題であった本書のタイトルであるが、日本にはフェミニズムという概念にアレルギーを持つ人が多いという事実を鑑みて、『女性の視点によるキリスト教神学事典』という案に、出版社も含めて全員が同意した。

4・4 女性の活動に関する異文化間対話のシンポジウム

一九九〇年、東京ドイツ文化センターで様々の領域における女性の活動状況について一連のシンポジウムや講

演会が主宰された。当時の西ドイツからもそれぞれ専門家が呼ばれ、日本の研究者との異文化間対話を熱く展開した。その内容は、東京ドイツ文化センター編『日本・ドイツ 女性の新しいうねり』（河合出版、一九九〇年）に成果が結晶している。

東京ドイツ文化センター主催「日独―芸術と社会の中の女性」と銘打って、女性運動、女性教育、宗教と女性、セクシュアリティ、音楽、映画製作といった諸領域を網羅した一大イベントとなった。ゴスマンと当時の東京ドイツ文化センター所長リヒアルト・シュナイダー氏との綿密な準備の賜物であった。

4・5 細川ガラシャのイメージ再考

ガラシャは、ヨーロッパ宣教師の報告により、「男性的な精神」を持った女性クリスチャンとして、西洋では早くから脚光を浴びていた。ガラシャは、キリシタン迫害時代に、殉教者にも匹敵する強い信仰と貞操を保った聖なるヒロインとして、崇敬の的となっていたのである。それは宣教師・教会側の政治的思惑もあったであろうが、世俗の権力にとっても魅力的であったと思われる。一六九八年七月三十一日、イエズス会が、ハプスブルクの皇帝レオポルド一世とその家族の前で、オペラ「世界最果ての国の強き女性」を上演し、好評を得たのが、良い例である。この中でガラシャは、揺るがぬ信仰を持ち、貞節な妻であり、愛情深い母であったため、彼女の死後、暴君であった夫の忠興も感化されて、彼女の賛美者になった、というものである。これはハプスブルク家が高く評価した美徳ある女性のモデルであった。⁽²²⁾ゴスマンはこうした美化・聖化されたガラシャのイメージは、当時の学位請求論文に謳いあげられた理想の女性観そのままである、と批判している。あたかも『女大学』など日

本近世に輩出した女訓書を思わせる内容である。

「女性たちは、自ら身につけた教育や教養をその子孫に継承しなければならない。そうすれば後代の人々が良い資質を受け継ぎ、家族の諸問題をうまく捌くことができ、同時に国家に正義が行き届き、深い信仰をもって教会に奉仕することができるだろう。というのは、男性は皆、母を通して、人となりを身に着けるからである。

(……) 本書は、博大な教養と謙虚さを兼備した才能豊かな女性を主題とする。そうした女性は「孝」と「道徳心」の見本となるであろう、すなわち両親に恩を感じ、夫に相和し、寡婦になれば、身を正し、子どもには気持ちよく接し、友人には義務を負い、困窮者には支援をするという見本を提示する」⁽²³⁾

この論文に見られるように、女性の教育や教養は、もっぱら良妻賢母になるためのものであり、教育が自己目的化したり、社会還元という目的に向かうとき、それは女性の徳目を損なう。こうした考え方は、二〇世紀全般まで、当然視されていた。しかし殉教者やつよい信仰を全うした女性は、宣教師によって、「女の体に迷い込んだ男性的精神」⁽²⁴⁾として称揚されたのである。驚くばかりに、儒教に基づく女性観によく似ている。

散りぬべき 時知りてこそ 世の中の

花も花なれ 人も人なれ

ガラシャの辞世の歌である。死と背中合わせの武士／兵士が桜花の潔く散る様に吾が身を擬えてきたことは、近代の軍歌にも見られる。武士の美学と桜が結びついたのは、せいぜい明治期であろうが、ガラシャが死に及んで、こう詠ったことは興味深い。当時の宣教師の文化コンテキストでは、ガラシャの生き方に、「男の精神」を感得したということも偶然ではない。細川元首相が、辞職した際に、ガラシャのこの歌を引用したのは、よく知

られている。⁽²⁵⁾

5 東西の人間（男女）理解の非対称性、相似と相違

フェミニスト神学を柱として、ゴスマン自身と我々研究会のメンバーによる学際的な宗教間対話が重ねられ、多くの気づきをもたらされた。フェミニスト神学の神髄は、抽象的理論に終始することではなく、学術理論に生活の視座を入れることにある。神学史、宗教史、聖書／聖典の解釈学、女性史、哲学を通して、我々は日常生活の内にどれだけ伝統的で、男性中心的な考え方が根を下ろしているか、それを無意識に男性のみならず、女性も当然視し、内面化してきたことに気づいた。政治・経済・社会といった表舞台は、歴史の家父長化に伴い、もっぱら男性の役割とされ、女性は明日への活力を提供し、次世代を育成する家庭・家の運営に関わる、いわゆる性別役割分業が生まれることになる。性別役割分業が「効率よく」機能したので、ほとんどの文化圏の歴史では、長いことそれが自然の摂理と見なされた。そういう中で形成された定型句が規範的な役割を担ってきた。

5・1 東西思想の相似

(1) 象徴言語が定型句として流布する過程で、性別を意味する現実言語と混同される西洋（キリスト教文化

圏）：男性⇨精神 nous 女性⇨感性 aisthesis

アレクサンドリアのフィロン（前二五／二〇〇四五／五〇頃）以来20世紀までの哲学史に支配的人間観。

東洋（儒教・仏教・神道文化圏）…「女身は垢穢にして、これ法器に非ず。云何んぞ能く、無上菩提を得ん」
『法華経』一一「提婆達多品」

「精神」や「法器」（ブツダになる可能性）という人間の持つ至高の価値を、性別で表現した宗教上、便宜上の言葉が、現実の性別役割に正当性をもたらした。

(2) 女性の終末論的イメージ…「変成男子」

西洋…「天の王国には、女性の姿がない」（外典「トーマス福音書」他⁽²⁶⁾

東洋…「浄土には女性がいない」（『法華経』一一「提婆達多品」他）

家父長社会、男尊女卑の慣習の正当化に資する。

(3) 女性の教養は、家政に役立つ限り容認

西洋…女性の教養は、よき子孫育成に用いるべき。教養ある女性が遊女であるとの疑いを持たれないためには、夫に対する貞節と従順が要請された。⁽²⁷⁾

東洋…輩出する「女訓書」が「才無きが女の徳」を喧伝する寛政の改革期に、赤蝦夷風説考」を著した工藤平助の娘、只野真葛（一七六三〜一八二五）がこの期の教養高い女性の運命の典型を示している。時代を反映して、女性存在の無意味さと無力さを痛感した真葛は、国学、蘭学の知識を援用しながら、女性性を抑圧している儒教倫理を批判し、政治と経済に新しい展望を開いた。著書『独考』に結晶した。時代の寵児であった滝沢馬琴の目に留まり、「そがかたちこそをうななれ、をのこだましあればなるべし」⁽²⁸⁾と絶賛する。真葛が出版、公刊の可能性を問い合わせたところ、彼女の思い上がりを受け取り、直ちに「独考」

への反論書を書き、彼女の思想も葬ってしまう。ただ、彼女の名は、儒教倫理に忠実に生き抜いた女の亀鑑として、『修身図鑑』に残されるのみである。⁽²⁹⁾ 詩、和歌、日記、小説の類なら兎も角、思想の書は女性にはふさわしくなかったのである。西洋においても、日本においても、女性と思想・哲学が結びつく、と理解されるためには、時が必要であった。真葛は、青鞥以前、前近代のフェミニズムの先駆者ともいえる。(4) 教養ある女性の著書に必須なのは謙虚さのトポス

西洋では、ゴスマンの女性史研究によると、一〇〜一八世紀の間、教養ある女性たちが、決まりの定型句を用いることで、女性の謙讓の美德を表明していることが、分かってきた。男性だけの思想界に、女性たちはいわばよそ者として、自己の思想を言表し、謙讓表現を通して、仲間入りができたのである。謙讓表現で始まる彼女たち思想には、うちに秘めた強い自律の意識がほとばしる。

西洋・ビンゲンのヒルデガルト（一〇九八〜一一七九）や他の女性神秘主義者はおしなべて、彼女たちの著作の冒頭に、自らを哀れな女性、女の浅はかな身、教養がなく、価値のない存在でありながら、神の靈的力に触れたと記す。それによって、彼女（たち）は、自らを現世の位階制に組み入れない工夫をしている。⁽³⁰⁾ 東洋・典型は、前項で言及した只野真葛である。その著『独考』のなかで「女の身にしては恥おもふべき事もかへりみず……」⁽³¹⁾ と言いつき書いている。これは女性が男性社会の自分の場を持つために必要な謙虚さのトポスであった。

5・2 相違点は何か？

西洋と日本の経済の仕組みや社会構造の相違から生じる、日本独自のフェミニズムの問題がある。フェミニズム・フェミニスト神学の問題を女性問題と矮小化してはならない。これはすぐれて男性の問題であり、現代では、さらに視野を広げてLGBTやQueerの存在も対象となっている。

(1) 日本人男性が持つ犠牲感情

キリスト教文化圏のフェミニズムは、男性による女性の抑圧と解放を最重要課題としてきた。神学の歴史が作り上げてきた男と女のシンボリズムが、男尊女卑の正当化に大きな役割を演じてきたことは、フェミニスト神学の発見である。エバとマリアの対比、教会のシンボリズム、それに婚姻のシンボリズム（2コリ11:2…エフェ5:22以下）が相まって造り上げた男女のシンボリズムは、現実の男女の関係性にアンバランスに作用した。

キリスト第二のアダム⇨花婿⇨神的パートナー⇨男性性

マリア⇨第二のエバ⇨花嫁⇨人間的パートナー⇨女性性⁽³¹⁾

他方、日本では男尊女卑の観念は根強かったとしても、教会のような権威に基づくものではなかった。日本では、外を男性、内を女性のテリトリーと住み分ける性別役割分業が、急激に発達した資本主義のなかで、男性に犠牲感をもたらしたのではないかと考えられる。日本の資本主義を担う企業や種々の組織体は、擬似家族の構造を持っていて、男性およびその血縁家族を構成員とする。そこでは情緒的絆が支配的で、労働者の権利、雇者の義務といった意識が薄い。七〇年代の経済奇跡の時代を担った男性たちは企業戦士と呼ばれた。自分が属する国家、社会、組織に対し、犠牲を強いられている、という感情を、少なからずの男性が持っていたのではない

か。日本のフェミニズムに、欧米のような勢いが無いのはなぜか、と問うゴスマンへの応答の試みである。

(2) 母性の評価が高い文化土壌 西洋において、男と女の関係を規定した主体は、キリスト教会であった。他方、教

会のような超世俗的権威は終始存在しなかった日本では、男性中心の力学で形成された「家」がその役割を果たしたのではないか。家名を挙げるため、あるいは「家」存続のため、と称して、近世以降の「家」は、ほとんどすべての日本人のあらゆる行動の規範を律する、いわば聖化された存在であった。そうした「家」意識を背負いながら、今日まで一貫して母性が賛美されてきた。日本の女性解放運動の先駆者の平塚らいてうによい例をみる。与謝野晶子のような例外もあるが、日本のフェミニズムは、個として女性の解放を見るだけでなく、母性どう調和させるかのジレンマを抱えて、論争が展開された。米国の心理学者は、日本の出生率の低さを鑑みて、母親の伝統的理想像が余りに高いハードルになっているのではないかと指摘している。³²⁾ この指摘の正否はともかく、日本の女性解放問題に、母性をどう活かすかが、喫緊の課題になっているといえよう。

6 日本の現代の問題に対峙して

伝統的性別役割は、相変わらず現代社会の多くの領域、教会など種々の共同体、諸種の社会組織、また福祉の分野でも、特定の期待をもって根強く残っている。また離婚件数の増加や伝統的家族形態の変化を嘆くあまり、フェミニズムが元凶とされることもある。若い女性に、専業主婦願望が多い、とメディアが数年前に取り上げた

ことがあり、驚いた。男女の平等、教育・就業の機会均等の観念が当然視される現代社会にあつて、こうした傾向が強いとなれば、改めて熟考しなくてはならない。地域差、年齢差により、明確なことはわからないが、ジェンダー観の再生産、つまり自分の母親を生き方のモデルとしていたケースが多いかもしれない。あるいは高い自己意識を持ち、職業に就き、競争社会を生き抜くことに臆しているのかもしれない。どのように競争社会で自立的に生きることへの不安を覚える経験の少ない若い女性に、フェミニスト神学は、どのように希望ある展望を提示できるのか？そして家庭生活と豊かな関係性のある社会生活を両立させることは、どのように可能か？ゴスマン自身も、また多くのフェミニスト神学者も試行錯誤しながら、それぞれの領域でモデルとなつてきた。広義のフェミニズム思想（種々の領域の女性史）は、歴史の表舞台に登場しなかつたすぐれた女性の生き方、思想、作品の数々を可視化してきた。若い世代は、それらのモデルから何かヒントを得られればよい。

高度に合理性と効率性を推進力に進展してきた資本主義は、真にヒューマンな生活を与えてきたであろうか？大きな波に呑み込まれ、自律の判断力、責任、自由の意味を実感する契機がないまま、流されていないだろうか。こうした資本主義に、フェミニスト神学・倫理学は、オータナティヴな価値観、オータナティヴな生活構想を提示している。たとえば、経済成長を従来のように狭義に解釈せず、「豊かさ」という別のコンセプト、たとえば長い視野で捉えるエコロジカルな意味での豊かさをアピールするなど。それには単純に「経済成長は良い」、「停滞は悪い」という既成の二分法に代わる、オータナティヴな思想が紡がれるとよい。男女の関係性についても、フェミニズムは、社会の関係を円でなく、楕円のイメージを描いている。定点が二つ（男と女）あることで、二分法の暴力を回避し、社会の他者をも平等に包摂できるからである。

ゴスマンがその生涯をかけて、異文化間・学際的女性史研究、そして数多くの対話を通じて実現しようと努力したこと、それは一人一人が、自律の人間になること、孤独を引き受ける成熟した人間になること、同時に「愛し、愛される」社会関係性を持つことであった。これは成熟した人間が構成する成熟した社会の理想像である。

(二〇一九年十二月)

註

- (1) 師である存在として、Frau Gössmannと言いつ慣わしていたが、ここでは敬称を略す。なお彼女の名前の表記であるが、ご本人の希望で、エリザベート・ゴスマンの表記が一貫する。
- (2) 自叙伝の序文の冒頭に記されている。Elisabeth Gössmann, *Geburtsfehler: weiblich*, p.7
- (3) Michael Rasko, *Dankfeier für Elisabeth Gössmann am 7.6.2019 – Gedanken*. 葬儀ミサの追悼文(未公開)。
- (4) *Metaphysik und Heilsgeschichte: Eine theologische Untersuchung der Summa Halensis* (Alexander von Hales), München 1964
- (5) 三三八・三四〇頁。
- (6) 岡野治子他訳。勁草書房一九八四年
- (7) 注五参照。
- (8) Helen Schüngel-Straumann, *Laudatio*, in: Margit Eckholt&Farina Dierker (Hg.), *Theologische Fraenforschung in "Beweger Stabilitas"*, IUDICIUM/München 2017, p.33
- (9) E. Goessmann(Hg.), *Archiv für philosophie- und theologiegeschichtliche Frauenforschung*, Bd.2:Eva-Gottes Meisterwerk, München 1985/改訂版2000:『女性の視点によるキリスト教神学事典』(日本キリスト教団)一九九八年)「エム」の項参照。

- (10) 第一巻の改訂版および別巻「ベンダへのヒルデガルト」を入れるで全九巻。
- (11) E. Gössmann/ E. Moltmann-Wendel/H. Pissarek-Hudelist/L. Praetorius/L. Schottroff/H. Schüngel-Straumann (Hg.), Wörterbuch der Feministischen Theologie, Gütersloh 1991/20022. (邦訳: E・トスモン／岡野治子／荒井 献編『女性の視点によるキリスト教神学事典』日本キリスト教団出版局 一九九八年)
- (12) 『神学大全』第一部第九三問題。高田三郎ほか訳『神学大全第七冊』創文社一九九六年。
- (13) Religiöse Herkunft, profane Zukunft? Das Christentum in Japan, München 1965
- (14) Gebhard Hiescher (Hg.), Die Frau (OAG-Reihe Japan modern, Bd.1) Berlin 1980,23-39.
- (15) Carolin Y. Robertson-Wensauer (Hg.), Japan im interkulturellen Kontext, Baden-Baden 1998.
- (16) Die Kannon-Gestalt im Mahāyā-Buddismus und die Maria-Kannon im japanischen Christentum, in: Manfred Hutter (Hg.), die Rolle des Weiblichen in der indischen und buddhistischen Kulturgeschichte, Graz 1998.
- (17) Himmel ohne Frauen? Zur Eschatologie des weiblichen Menschseins in östlichen und westlichen Religion, in Elisabeth Gössmann& Günter Zobel (Hg.), Das Gold im Wachs, München 1988, 379-426.
- (18) 片山和子訳 女子パウロ会一九七一年 三頁。
- (19) 注九参照。
- (20) Geburtsfehler: weiblich, 404
- (21) E. Gössmann, Gracia Hosokawa Tama (1563-1600), in: Dies. (Hg.), Japan – ein Land der Frauen?, IUDICIUM 1991
- (22) Margret Dietrich, Gracia Hosokawa. En japanisches Vorbild für die Habsburger Dynastie, in: Theodor Schneider/Helen Schüngel-Straumann (Hg.), Theologie zwischen Zeiten und Kontinenten. Freiburg-Basel-Wien 1993, 447.
- (23) Joh. Andreas Planer: "Dissertatio historico-literaria Gynaecium doctum oder Vom Gelehrten Frauenzimmer", s. E. Gössmann (Hg.), Archiv für philisohie- und theologiegesehichtliche Frauenforschung Bd. 2. IUDICIUM 1985. Kap. 4.

- (24) E. Gössmann, 1991, 57.
- (25) ゴスマン自身は、この辞世の歌については何も言及していない。
- (26) 注一五参照。
- (27) 注二一参照。
- (28) 滝沢馬琴「独考論」『新燕石十種第二』所収、廣谷国書刊行会、一九二七年。
- (29) 岡野治子「フェミニスト視点からの日本宗教批判」(奥田暁子・岡野治子編『宗教のなかの女性史』青弓社、一九九二年、32頁以下。: Haruko Okano, Tadano Makuzu (1763-1825). Gelehrte Kritikerin des konfuzianischen Feudalsystems und Vorläuferin der neuzeitlichen Frauenbewegung, in : Schünigel-Straumann/Schneider (Hg.), *Theologie zwischen Zeiten und Kontinenten*, 435f.
- (30) E. Gössmann, *Archiv für philosophie- und theologiegeschichtliche Frauenforschung*, Sonderband: Hildegard von Bingen. *Versuche einer Annäherung*, München 1995, 15.
- (31) 岡野治子「聖とセクシュアリティの拮抗するキリスト教文化」(田中雅一編『女神 聖と性の人類学』平凡社、一九九八年、二五二頁以下参照。
- (32) Susan D. Holway, *Women and Family in Contemporary Japan*, Cambridge 2010.